

中学校区におけるめざす子ども像： 積極的、主体的に学び続ける子・自ら学び、共に考える子

学校教育目標 「ゆめを持ち、自分の良さを伸ばし、自分も人も大切にできる、心豊かな子どもの育成」
令和7年度 学校重点目標 「心地よい学びがあふれる学校づくり」
●わくわくする心地よさ：知的好奇心を刺激し、子ども自身が「問い」をもち、主体的に解決していこうとする学びを実現する。
●安心できる心地よさ：すべての子どもたちにとって学校や教室が安心できる場となるよう、子どもたち一人一人が自分も他者も大切にしようとする心情の醸成を図る。
●達成する心地よさ：学習、生活場面の中で個人また集団での「できた」「わかった」体験を積み重ね、集団としての自尊感情を高める。

Table with 2 columns: 確かな学びの現状, 豊かな心・健やかな体の現状. Content describes current status of learning and student well-being.

Main evaluation table with columns: 大項目, 中項目, 具体目標, 具体的な取組, 判断基準, 評価方法, 評価時期, 進捗確認, 達成状況(年度末). Rows cover '基礎基本の定着' and '指導の工夫・改善'.

豊かな心・健やかな体	自尊感情の育成	<p>人権教育の指導内容、指導方法を研究し、授業を実践し、仲間づくりとコミュニケーションの向上を図る。</p>	<p>・授業の中で、ペア活動・班活動を取り入れ、交流の場を増やしている。</p>	<p>授業の観察 実践報告書(人権ウイーク)</p>	<p>随時 年度末</p>	<p>A</p> <p>どの学年・学級においても、授業の中でペア活動やグループ活動を積極的に実施している。</p>	<p>A</p> <p>各月の人権テーマに応じた実践やペア活動、学年間の交流の機会の充実により、仲間づくりとコミュニケーションの向上をはかることができた。</p>	<p>A</p> <p>計画の遂行に留まらず、成果の質を問う視点が寄せられました。傾聴や推察、非言語情報の活用等、多角的なスキルの育成を求める具体的な提案のほか、若手教員の指導支援など組織的サポートの必要性も指摘されています。形骸化させない実効性のある人権教育の展開に対し、地域から更なる深化への強い期待が寄せられています。</p>
		<p>総合的な学習の時間・生活科と人権教育とのかわりを年間計画に位置付け、各学年の学習の流れに見通しを持たせる。</p>	<p>・年間指導計画を作成し、計画的に実施している。</p>	<p>年間指導計画</p>	<p>年度末</p>	<p>A</p> <p>年間計画をもとに概ね順調に実施しているが、まだ実施できていない部分もある。今後は各学年で確認を行い、必要に応じて学習内容を追加・変更し、進めていく。</p>	<p>A</p> <p>年間計画をもとに、おおむね順調に実施できた。毎学期初めと終わりに計画の見直しや進捗の確認を行う機会を設けたので、漏れのないように行うことができた。</p>	<p>A</p> <p>毎月の共有体制を「十分である」と評価する声がある一方、具体的な共有手法や記録のあり方を問う指摘も寄せられました。情報の蓄積や管理、活用方法の明確化に対し、地域社会からの高い関心が示されています。</p>
		<p>研修指導委員会を通して、困っている子どもを報告する機会を設け、月ごとの変化や成長を学校全体で共有する。</p>	<p>・配慮が必要な児童の実態を把握し、児童理解を深める。</p>	<p>毎月の研修指導委員会</p>	<p>毎学期</p>	<p>A</p> <p>計画通りに実施しており、人権委員会や職員会議において児童の実態を全職員で共有している。今後は、現状の報告に加えて児童の成長の様子についても積極的に発信していく。</p>	<p>B</p> <p>配慮が必要な児童の実態は、毎月の研修指導委員会で情報共有できた。学校全体にもっと広げられる機会をとることができたよかった。</p>	<p>A</p> <p>高い肯定感を歓迎する一方、設問の抽象性を指摘し、多様性の尊重や他者を認める具体的な視点の必要性を問う意見が寄せられました。数値の維持を願うとともに、他者理解の質をより深める指導への期待が示されています。</p>
		<p>道徳の授業や人権教育をはじめ、普段の生活の中で、ちがいを認め合い、たがいに思いやる優しさを育てるために人権テーマを設定し、人権の講話や授業実践に取り組む。</p>	<p>・(3～6年生)学校アンケートの「人の気持ち分かる人になりたいと思いますか」という項目で、「当てはまる」という回答を90%以上にする。</p>	<p>学校アンケート</p>	<p>年度末</p>	<p>B</p> <p>毎月の朝礼での講話、月ごとのテーマの実践を継続して行っていく。</p>	<p>A</p> <p>(3～6年生)学校アンケートの「人の気持ち分かる人になりたいと思いますか」という項目で、「当てはまる」という回答が95.5%であった。</p>	<p>A</p> <p>研修の充実度は評価しつつ、「困り感を自覚していない児童へのアプローチ」の難しさに言及がありました。個別の支援に加え、認知特性の多様性を前提とした「認知方法の平均化」を求める期待が寄せられています。</p>
		<p>●(特別支援教育に関して) ・様々な課題や困難を抱える児童の特性や発達段階に応じた指導の工夫と、授業のユニバーサルデザインを推進する。 ・児童や保護者の困り感に寄り添い、教育相談を充実させる。</p>	<p>・児童のアセスメントを通して、具体的な支援・対応策を検討する。 ・職員一人ひとりのスキルアップをめざして、校内研修を実施する。</p>	<p>授業の観察 研究授業 教室環境</p>	<p>年度末</p>	<p>A</p> <p>課題のある児童についてアセスメントを実施し、支援COと担任間で支援策の検討を行っている。毎月の研修を通して、特別支援教育における職員のスキルアップを図っている。</p>	<p>A</p> <p>支援学級児童が通常学級でも安心して過ごせるよう、全学年で啓発授業や交流会を展開した。校内の特別支援研修には毎回たくさんの教員が参加した。</p>	<p>A</p> <p>自己肯定感を育む姿勢や保護者の思いに寄り添う対応に、深い共感と賛同の声をいただきました。多忙を極める支援現場を慮りつつも、担当者任せにせず学校全体で課題を共有し、組織的に取り組む体制を「大きな強み」として高く評価されています。今後も全校一丸となったインクルーシブな支援の継続が期待されています。</p>
規範意識の育成	学校のルールや集団行動を身に着ける。	<p>日常生活に関して ・あいさつの励行 ・帽子や名札の着用 ・チャイムを守る ・清掃指導の推進 ・いじめ事象の未然防止・早期発見・解決 ・集団行動指導の徹底 (集合、整列、話を聞く姿勢)</p>	<p>・あいさつができる。 (あいさつレベルの設定、活用) ・チャイムで素早く行動ができる。 ・帽子を登下校時必ず着用している。 ・名札を毎日必ず着用している。 ・積極的に掃除をしている。 ・いじめやいじめにつながりそうな事象を先生や保護者、友達に相談して解決している。</p>	<p>児童観察 生活の記録 アンケート 児童観察</p>	<p>随時 学期末 年度末</p>	<p>B</p> <p>あいさつはよくできている。地域の方からの好評の声も多い。帽子の着用も熱中症対策の観点から年度初めから丁寧に声をかけ続け、着用率も上がっている。課題としては、チャイムと同時に授業を始めることや掃除の開始時間など時間を守ることに限ってはまだまだ課題である。特に学年行事が多くなる2学期、特に10月からは時間を守ることに限っては指導の徹底を行っていく。</p>	<p>B</p> <p>校内の規律面での課題が残っている。特に身だしなみに関しては、帽子・名札の未着用をはじめ、ピアス着用、染髪など課題がある。 ・挨拶に関しては、朝礼や児童会を中心に継続して取り組むことができた。 帽子・名札の着用はおおむねできている。また、運動場で遊ぶ時間が増えたが、チャイム着席も問題ないと言える。</p>	<p>B</p> <p>生活習慣の定着を評価する一方、染髪やピアス等の規律課題に対し、思春期の自己表現という側面を理解しつつも、怪我の防止や家庭の教育力の重要性を指摘する声が上がりました。チャイム着席については、中学校進学を見据えた継続指導の必要性が強調されています。学校のみならず、家庭の理解と協力のもとで、発達段階に応じた規律意識を醸成していくことへの強い期待が寄せられています。</p>
		<p>保健に関して ・毎月の安全点検 ・児童に応じた安全指導 ・保健について啓発活動</p>	<p>・保健安全委員会を通して、安全面について考え、怪我・事故の防止に努める。 ・危険を予想し、怪我や病気・事故をしないよう注意して行動できる。 ・ほげんだよりや保健室前掲示を活用し、児童・職員の安全に対する意識を高める。</p>	<p>・児童観察 ・安全点検表 ・保健室利用状況</p>	<p>随時 年度末</p>	<p>B</p> <p>児童の保健安全委員会の活動では、児童からの提案で、「熱中症予防」と「安全な遊具の使い方」「廊下の正しい歩き方」のポスターを作って掲示し、全校児童に啓発活動を行った。今年度は暑い日が続いていたが、水分補給や帽子の着用など、児童自ら熱中症を予防しようとする姿が多く見られた。</p>	<p>A</p> <p>児童の保健安全委員会で、保健安全に関するクイズラリーを実施し、寒い中でも、外に出て運動するように啓発をした。また、昨年度と比較して、保健室への来室人数が減少している。(昨年度11月は458人に対し、今年度11月は188人)</p>	<p>A</p> <p>来室者数の大幅な減少という成果に対し、高い関心と好意的な評価をいただきました。一方で、特定時期の数値だけでなく、年間を通じた推移や長期休暇明けの児童の様子など、より詳細な実態把握を求める声も上がっています。数値の背景にある児童の心身の変化を注視し、継続的な啓発活動の質を高めていくことへの期待が寄せられています。</p>
健康で丈夫な体づくり	健康・安全について理解を深め、運動に親しませるとともに、体力の向上を図り、楽しく明るい生活を営む態度を育てる。	<p>体育指導・体力向上に関して ・高学年体育専科による他学年への授業の実施 ・なわとびタイムの実施</p>	<p>・新体力テストの記録を比較(4月と2月に各学年1クラスを抽出し実施) ・なわとびタイムの参加状況</p>	<p>・新体力テスト ・児童観察</p>	<p>随時 年度末</p>	<p>A</p> <p>なわとびタイムを毎週水曜日に実施し、毎回50～100名程度の児童が参加している。各学年、体育の授業でもなわとびに取り組む、なわとびの習慣がついてきている。</p>	<p>A</p> <p>・堺市平均を上回っている種目が「握力」「ソフトボール投げ」「立ち幅跳び」。下回っている種目が「上体起こし」「20mシャトルラン」 ・なわとびタイムを11月からの5か月間で実施し、毎回約50名が参加するなど取り組む児童が増えている。</p>	<p>A</p> <p>なわとびの習慣化を評価しつつ、「次なる活動」や、休み時間・放課後の自発的な運動への波及を期待する声が届いています。また、運動習慣の二極化を懸念する指摘もあり、全児童の体力向上に向けた更なる工夫が求められています。</p>
		<p>望ましい食生活習慣の確立に関して ・全学年で朝食に関する指導 ・全学年で食品ロスに関する指導 ・生活習慣アンケート結果を活用した啓発 ・長期休業中に食事作りの課題を実施</p>	<p>・朝食を毎日食べると回答した割合85% ・給食を残さず食べていると回答した割合50% ・食品ロスについて知っている割合90% ・自分で食事の用意ができると回答した割合85%</p>	<p>・教職員アンケート ・生活習慣アンケート</p>	<p>学期末 年度末</p>	<p>B</p> <p>3年生保健での朝食の指導、給食の残食と食品ロス削減のための「りんごの木」、長期休業中の食事準備の課題などに取り組んでいる。</p>	<p>B</p> <p>・朝食を毎日食べる82.9%・給食を残さず食べている29%・食品ロスについて知っている96%・自分で食事の用意ができる88.5%という回答割合となった。食品ロスについては意識が高まったが、朝食摂取と給食を残さず食べることについて課題が残った。</p>	<p>B</p> <p>食品ロスへの意識向上を評価する一方、給食の残食率の高さに対し、要因の分析や児童の認識との乖離を指摘する声が届いています。「食事の用意」の定義の確認を含め、数値の背景にある実感を重視した丁寧な実態把握と指導への期待が寄せられています。</p>
		<p>生活習慣の確立に関して ・アンケートの実施やアンケート結果を活用した啓発</p>	<p>・みんなくアンケートで「毎日、何時頃にねますか」の項目で、前学期より早く寝る児童が増えている。 ・みんなくアンケートで就寝時間が10時までの回答児童70%以上</p>	<p>・みんなくアンケート</p>	<p>学期末 年度末</p>	<p>B</p> <p>2～6年生を対象に、みんなくアンケートを実施し、睡眠に対する児童の実態を確認した。引き続き、3学期もアンケートを実施し、児童に睡眠時間をしっかりとることの大切さを指導していきたい。</p>	<p>B</p> <p>10時までに就寝している児童は低学年は70%以上だったが、学年が上がるほどその割合が減っている。児童の実態を把握することができたが、アンケートを教育活動へ反映させるまでには至っていない。</p>	<p>B</p> <p>睡眠不足への懸念と、家庭環境が及ぼす影響を指摘する声が上がっています。学年別の実態に応じたきめ細かな分析のほか、帰宅後の生活習慣の把握など、家庭と連携した実効性のある指導への期待が寄せられています。</p>
		<p>校長より(年度末) 本年度は「心地よい学びがあふれる学校づくり」を重点目標に掲げ、教育活動の充実にも努めました。「わくわくする心地よさ」の面では、授業研鑽や自主学習の推進を通じ、子どもが自ら問いをもつ主体的な学びの基盤を築きました。「達成する心地よさ」については、なわとびタイムや食育等の活動を通じ、個人と集団の両面で「できた」体験を積み重ね、自尊感情の高まりを確認できました。また、特別支援教育の組織的充実により、全ての児童にとっての「安心できる心地よさ」の醸成にも注力いたしました。一方で、学校関係者評価からは、数値に表れない児童の本音の把握や、家庭と連携した生活習慣の改善など、支援の質を問う貴重な示唆をいただきました。これらの提言を真摯に受け止め、次年度はさらに一人ひとりの「わからない」に寄り添い、心地よさを実感できる学びを深化させます。教職員一丸となり、地域と共に子どもたちの輝く未来を育む学校づくりに邁進してまいります。</p>	<p>学校関係者評価者から(年度末) 本校の教育活動に対し「組織的な対応」や「若手育成」を高く評価いただく一方で、数値の背後にある「児童の生の声」や「実態」をより深く探るよう、鋭い指摘をいただきました。読書や食育、規律指導等において、単なる計画遂行に留まらない、家庭と連携した実効性ある指導を求める声は、本校がさらなる質の向上を目指すための重要な視点です。特に、児童の「わからない」や「困り感」に寄り添う丁寧な対話と、思春期の成長を見据えた多角的な視点への期待が寄せられました。これらを重く受け止め、地域社会と一層深く連携しながら、真に「心地よい学び」を創出する学校づくりに邁進いたします。</p>					